

かながわの 学びづくり



必携！

神奈川県教育委員会
教育局支援部子ども教育支援課
平成28年6月

はじめに

平成19年4月に、小学校第6学年、中学校第3学年を対象に全国学力・学習状況調査が実施されました。この目的として

- ① 全国的な義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、各地域における児童・生徒の学力・学習状況を把握・分析することにより、教育及び教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- ② 各教育委員会、学校等が全国的な状況との関係において自らの教育及び教育施策の成果と課題を把握し、その改善を図る。

の2点が掲げられています。

この調査の実施と併せて国は、各都道府県教育委員会に対し、調査結果等の分析をとおり、今後の指導の改善につなげることを目的とした委員会の設置を義務付けました。本県としては、有識者を中心とする「神奈川県検証改善委員会」を設置し（H20.3）、結果を分析し、報告書として「全国学力・学習状況調査の結果と分析、並びに今後の指導への示唆」をまとめました。

この報告書から、わかる授業の実現や確かな学力の育成には、家庭・地域と連携・協働し、それぞれの教育力の充実が不可欠であることが改めて明らかになりました。そこで、授業を通じた教員の授業力の向上、家庭の協力による家庭学習の習慣化等を内容とする「かながわ学びづくり推進事業」を実施することとしました。

この事業は、平成20年度の中井町からスタートし、平成27年度末までには、政令市・中核市を除く29市町村全てで取り組んでいただくことができました。

この度、これまでの取組で蓄積された事例を整理し、そこから得られた成果と課題、好事例を各学校へフィードバックすることが、本事業を次のステップにつないでいくために重要であると考え、本冊子を作成しました。

「わかる授業」をとおして、子どもたちの「わかった」「できた」をつなげ、「勉強が楽しい」「学校が楽しい」と、子どもたちが感じることのできる学校づくりの一助となることを願っています。

神奈川県教育委員会教育局
支援部子ども教育支援課長
宮村 進一

もくじ

- 1 「かながわの学びづくり」とは・・・・・・・・・・ 3
- 2 「かながわの学びづくり」のはじまり・・・・・・・・ 5
- 3 かながわ学びづくり推進地域研究委託事業・・・・ 9
☆ここに注目☆
かながわ元気な学校ネットワークについて・・・・ 13
- 4 かながわ学力向上シンポジウム・・・・・・・・・・ 29
- 5 これまでの取組の成果と課題・・・・・・・・・・ 35

<資料>

- 1 かながわの学びづくりプラン・・・・・・・・・・ 38
- 2 「平成 19 年度全国学力・学習状況調査(神奈川県)の結果と分析、並びに今後の指導への示唆」・・・・ 76
- 3 平成28年度かながわ学力向上実践推進事業・・・・ 90
- 4 かながわ元気な学校づくり通信「はにい」・・・・ 91
- 5 「教室に行こう」・・・・・・・・・・ 96
- 6 各事業要項等・・・・・・・・・・ 98
- 7 かながわ学びづくり推進地域研究委託事業に
取り組んだ学校一覧・・・・・・・・・・ 102

1 「かながわの学びづくり」とは

(1) 「かながわの学びづくり」のねらい

全国学力・学習状況調査の結果を活用して、子どもたちの学力の向上を図るためには、何よりも、この学力調査結果の持つ意味をしっかりと捉えておくことが必要です。「学力調査」は、限られた時間の中で、点数化しやすい力を見ていますが、点数化しやすい力以外に、各学校では、子どもたちに育てたい力があります。

そこで、「かながわ学びづくり推進事業」を進めるにあたり、

- ・授業の中で「子ども同士の学び合う力」の育成を図ること。
- ・教員自身が自分の指導方法を常に振り返り、その際、校内で協働的・組織的な研究・研修を行う体制を整えること。
- ・校内の研修会・研究会には、研究者や行政関係者がかかわることで、多面的な見方、考え方で議論を行うこと。

これらを基本とし、

『授業の中で、「子ども同士の学び合う力」を育成し、学びの質を向上させるため、指導方法の工夫・改善、研修・研究に努める。』をねらいとしました。本事業の推進にあたっては、学識経験者、学校代表、保護者代表、行政関係者などを構成員とする「かながわ学力向上支援連絡協議会」を設置し、取り組むこととしました。

<参考> 「かながわ学力向上支援連絡協議会の設置及び運営に関する要項」より

2 所掌事務

協議会は、神奈川県の子供・生徒の実情や課題を踏まえ、効果的な学力向上を図るために、次に掲げる事項について研究協議する。

- (1) 基礎的・基本的な知識及び技能を習得させるための指導方法・指導内容について
- (2) 知識及び技能を活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむための指導方法・指導内容について
- (3) 主体的に学習に取り組む態度を養うための指導方法・指導内容について
- (4) 県学習状況調査、全国学力・学習状況調査等の結果に基づく課題解決のための教育活動の改善について
- (5) 家庭学習の在り方を含めた保護者・地域との連携について
- (6) 大学等の研究機関との連携・協力のためのシステムづくりについて
- (7) その他、学力向上に必要な事項について

(2) かながわ学びづくり推進事業について

授業の中で、「子ども同士の学び合う力」を育成し、学びの質を向上させるため、指導方法の工夫・改善、研修・研究に努める。

このねらいを達成するために、3つに取組を整理し展開することとしました。

【事業展開】

かながわ学力向上 支援連絡協議会

目的・役割

- 「かながわ学びづくり推進事業」の中核となる協議会
- かながわ学びづくり推進地域研究委託事業やシンポジウムの内容についての協議

取組内容

- 全国学力・学習状況調査の結果等の分析
- 研究校等による実践研究の成果や課題の整理
- 学習に関し、家庭等との役割や連携の在り方の具体的例の提示

かながわ 学びづくり推進地域 研究委託事業

目的・役割

- 「子ども同士の学び合う力」の育成
- 校内研究・研修に外部講師等を招聘し、研究・研修の活性化
- 家庭・地域との連携の在り方の研究

取組内容

- 指導方法の工夫・改善を図り、児童・生徒の学習意欲を高める研究を推進する。
- 定期的に研究会等を開催し、外部有識者からの助言を得て研究を推進
- テーマに家庭や地域との連携のあり方を位置付け研究を行う。

かながわ学力向上 シンポジウム

目的・役割

- 学校、家庭、地域の教育力の向上に資するテーマを設定し、幅広い参加者を募り、意見交換等を行うことで、学校教育への理解を図る。

取組内容

- シンポジウム等の開催を通して広く意見を交換し課題を共有し、学校、家庭、地域のそれぞれが果たす役割を明確にし、連携を推進する。

2 「かながわの学びづくり」のはじまり

(1) 中井町の取組

平成 19 年度～20 年度の中井町の取組
～「達人教師と学び続ける子どもたちを目指して」～

ア 県教育委員会の研究指定を受けるまでの経緯

中井町教育委員会では、平成 19 年度から中村小学校、井ノ口小学校、中井中学校の2小1中の3校の教頭を中心に、児童・生徒の学力向上に向けた話し合いを行う「学力向上会議」を設置しました。併せて、各校の研究授業と授業研究会に町教育委員会の指導主事が訪問して指導・助言を行う他、外部から有識者を招いて指導・助言を得ることとしました。

こうした取組を進める中で、様々な課題が見えてきました。

一つ目に、教員の世代の片寄りとして、中堅教員が少ないことから、教員がお互いを高め合う関係が築きにくくなっていることが挙げられました。

二つ目に、刺激や情報の不足として、専門書を読む時間が作れない、町には指導主事が1名しかいない、中学校においては同じ教科の教員が一人しかいないといったことから、教員同士が高め合う機会や関係性を築きにくくなっていることが挙げられました。

これまでの中井町の各学校で実施していた研究協議の方法は、全員で一つの授業を参観し、その後、口の字型に机を並べて、自評、協議（協議はなかなか深まらず、指名しての感想）、指導主事による指導講評、授業者を拍手でねぎらう、研究会の終了といった流れで行われていました。

こうした状況を改善し、教員の授業力を高めるために、町教育委員会として、研究テーマを「達人教師と学び続ける子どもたちを目指して～確かな学びをつくる指導の工夫～」として、全ての小中学校で研究に取り組むこととしました。

その際、次の4つを研究の視点としました。

- ① 基礎的・基本的な知識や技能を確実に習得する授業や指導過程の工夫改善
- ② 知識・技能と活用を身に付ける調和のとれた授業の創造
- ③ 児童・生徒の意欲化を図り探求心を高める指導方法、教材等の工夫
- ④ 学びの習慣化を目指す指導方法の工夫、家庭との連携の推進

イ 新たな展開～3校合同の研究会～

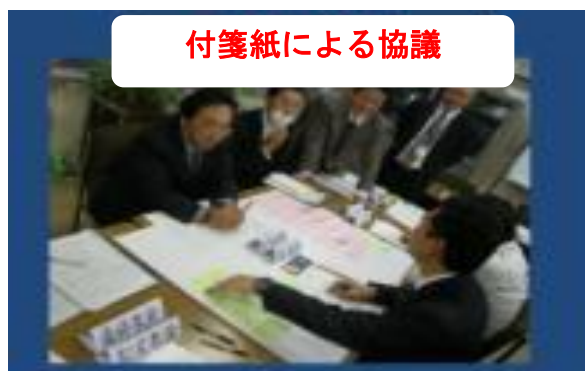
研究を進めるにあたって、国立教育政策研究所の千々布 敏弥総括研究官に継続的な指導・助言を求めることとしました。第1回の合同研究会では「教師力を高める授業研究の在り方」をテーマとし、授業を振り返りながら、授業研究の課題等について指摘を受けることができました。

ウ 研究協議会の変化

前述した指導を継続的に受けることで、様々な協議形態を工夫し、次第に校内研究への取組が変わってきました。

協議形態の例

- ◆ 小グループによる協議（発言しやすい、助言者にも質問しやすい）
- ◆ 付箋紙による協議（小さな気づき、発言が残る）
- ◆ 書き込みによる協議（視点が明確になる、他の人にもわかりやすい）
- ◆ 壁による協議（写真で授業を確認、協議の柱が明確になる）



エ 中間成果（平成20年10月）

研究に取り組む3校で、延べ30回の授業研究が開催され、ほぼ各回に、学識経験者等による指導助言を受けながら実践研究が行われました。その結果、次のような成果が見られました。

- ・小中連携の視点から研究会での交流が積極的に行われた。
- ・町の生活改善キャンペーンとタイアップすることで、家庭・地域と連携して生活習慣の改善を図った。
- ・指導助言者が全校にかかわることで、同じ視点で研究実践に取り組むことができた。
- ・授業改善に向けて、授業研究の在り方そのものに視点を当てた実践研究が行われ、回数を重ねるごとに授業研究会が充実してきた。
- ・教員側の積極的な取組を反映し、児童・生徒が自分なりの方法で問題解決に積極的に取り組み、意欲的に発言する場面が見られるようになった。
- ・公開している授業研究会に、他地区からの参加者も増えてきた。

オ 「かながわ学力向上シンポジウム」での発表

平成21年1月に開催された「かながわ学力向上シンポジウム」において、平成19年度、20年度の中井町の取組を発表し、これまでの経緯と中間成果の内容に加え、研究協議を深める工夫、今後の課題等について、全県に向けて発表されました。

【発表の一例】

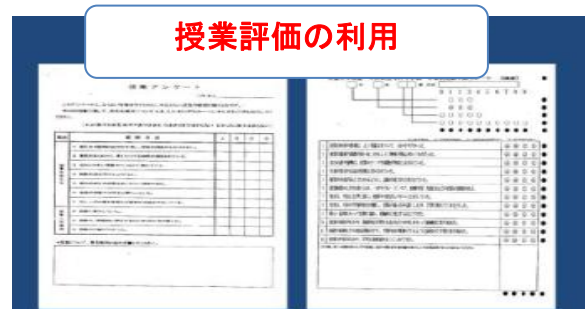
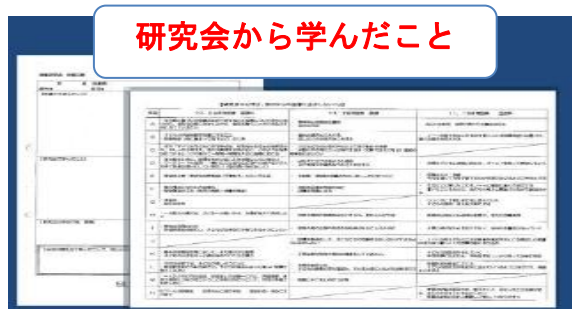
① 研究協議を深める工夫

生徒による授業評価

中井中学校では、生徒による授業評価を取り入れ、生徒が、教員の指導について評価した結果を、授業後、すぐに集計して研究会での協議の資料とした。

研究会で学んだことのまとめ

小学校では、各教師がその日の研究会で何を学んだか、明日からの授業に生かしたいことは何か等を書いてまとめ、全参加者に配付することで、授業者だけでなく、協議に参加した教員全員の学びにつなげた。



② 成果

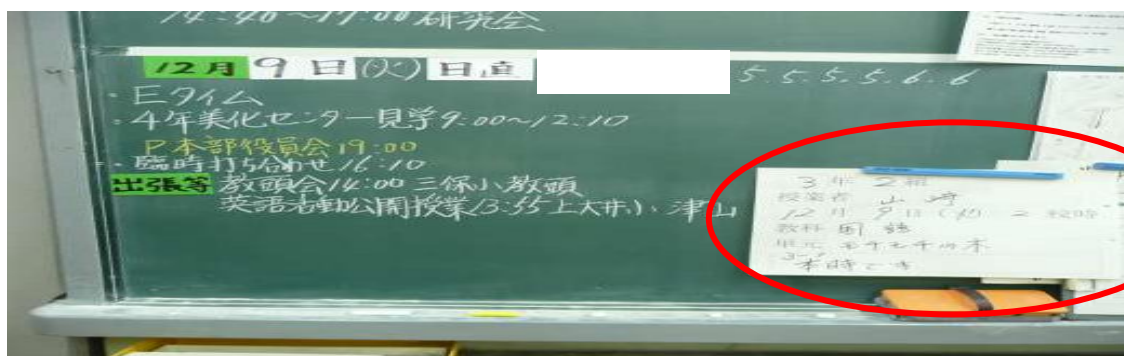
当初の研究授業では、「授業のねらいが明確になっていない」「教員から一方的に教えるばかりで、児童・生徒の主体的な活動が保障されていない」といった課題が見られ、児童・生徒の考えを引き出す授業の工夫が必要であることが話し合われました。

その後、この課題の解決に取り組み、研究授業を積み重ねる中で、次のような成果が見られました。

「与える教師」から「受け取る教師」へ

- ・ 授業のねらいを意識してすすめるようになった。
- ・ 座席表で児童・生徒の考えをメモしながら指導するなど、一人ひとりの状況を丁寧把握し、それを生かすようになった。
- ・ 板書の仕方について、児童・生徒が具体的に考えられるように工夫し、授業のねらいと照らしてわかりやすくまとめるようになった。

また、あらかじめ設定された研究授業だけでなく、授業を見てもらいたい先生が、職員室の黒板に自分の授業案内を掲示して、できるだけ多くの先生方に授業を見てもらおうという動きが始まりました。



③ 課題

課題については次の3点にまとめられました。

- ・ 教材研究 : 授業のねらいに迫るための事前の研究を充実する
- ・ 小中の連携 : 時間をやりくりして小中の交流をすすめ、子どもの学びの連続性の視点を大切にする
- ・ 学習の習慣化 : 町の生活改善キャンペーンとタイアップしながら、授業との関連の中で家庭での学習の習慣化を考えていく

このように、平成19年度から20年度の「達人教師と学び続ける子どもたちを目指して」をテーマとした中井町の取組から、「かながわの学びづくり」が始まりました。

3 かながわ学びづくり

推進地域研究委託事業

(1) 目的

この事業は、県内の児童・生徒の学力向上のため、市町村教育委員会及び各学校との連携・協力のもと、

- ・授業の中で「子ども同士の学び合う力」の育成を図ること。
- ・教師自身が自分の指導方法を常に振り返り、その際、校内で協働的・組織的な研究・研修を行う体制を整えること。
- ・校内の研修会・研究会には、研究者や行政関係者がかかわることで、多面的な見方、考え方で議論を行うこと。

これらを基本とし、

『授業の中で、「子ども同士の学び合う力」を育成し、学びの質を向上させるため、指導方法の工夫・改善、研修・研究に努める。』をねらいとしました。本事業の推進にあたっては、学識経験者、学校代表、保護者代表、行政関係者などを構成員とする「かながわ学力向上支援連絡協議会」を設置し、取り組むこととしました。

(2) 構成メンバー

- 横浜国立大学教育人間科学部 池田 敏和 教授
- 横浜国立大学教育人間科学部 青山 浩之 教授
- 県公立小学校長会代表
- 県公立中学校長会代表
- 県PTA協議会代表
- 横浜国立大学教育人間科学部附属鎌倉中学校教諭
- 横浜市教育委員会指導主事
- 川崎市教育委員会指導主事
- 相模原市教育委員会指導主事
- 横須賀市教育委員会指導主事
- 各教育事務所指導主事

(3) 各教育委員会と研究推進校の役割

ア 市町村教育委員会の役割

「かながわ学びづくり推進地域研究委託事業」の委託を受けた市町村教育委員会は次の役割を担います。

- ・児童・生徒及び地域の実態や課題を踏まえ、研究課題を設定する。実態や課題をとらえる際は、県学習状況調査、全国学力・学習状況調査等の結果を活用する。
- ・推進校に対し、本事業の円滑な実施のために必要な指導・助言を行う。
- ・推進校の取組を支援し、教員の指導力の向上、研究情報の共有化及び研究の成果の普及を図る。
- ・推進校に対し、家庭・地域との連携・協力を得るために必要な関係機関との調整・連絡を図る。
- ・推進校に対し、県学習状況調査問題による調査を実施し、その結果に基づく児童・生徒の学習状況を把握し、指導方法等の工夫・改善を図る。
- ・全国学力・学習状況調査等の結果を分析し、研究の成果を検証する。

「平成 27 年度かながわ学びづくり推進地域研究委託事業要項」4 事業の実施(3)より

イ 研究推進校の役割

「かながわ学びづくり推進地域研究委託事業」の研究推進校は、推進地域の研究計画に基づいて研究課題を設定し、当該の市町村教育委員会と連携を図り、学力の向上のため家庭・地域との連携・協力を得た実践研究を行います。研究課題については次のような例を示しました。

(課題例)

- ・県学習状況調査、全国学力・学習状況調査等の結果に基づく課題解決のための授業改善に向けた授業研究の充実・改善や指導方法、教材等の工夫や保護者等への働きかけ等の工夫
- ・思考力・判断力・表現力等の育成のための単元開発や指導方法、教材等の工夫
- ・学習習慣の定着や主体的に学習に取り組む態度の育成のための指導方法、教材等の工夫
- ・学習習慣や望ましい生活習慣の定着に向けた家庭・地域との連携・協力の推進
- ・学校外の様々な分野の人材や施設・団体等（大学（研究者、教員志望の学生等）、NPOなど）との効果的な連携・協力による指導の充実

「平成 27 年度かながわ学びづくり推進地域研究委託事業要項」4 事業の実施(4)より

ウ 県教育委員会の役割

各教育事務所や子ども教育支援課の指導主事が市町村、学校に出向き、各学校で行われている取組を集め、取組の価値を言葉にして意味付け、発信することに努めています。

また、この事業を通じて、市町村教育委員会が学校をサポートする仕組みづくりを支援しています。

さらに、各教育事務所では学力向上支援連絡協議会を設置し、地区ごとに学力向上シンポジウムを開催しています。

- ・ 推進地域及び推進校に対して、本事業の円滑な実施のために必要な指導・助言を行う。
- ・ 推進地域の取組を支援し、教員の指導力の向上、研究情報の共有化及び研究の成果の普及を図るために、各地区において学力向上支援連絡協議会を設置するとともに、地区ごとに学力向上シンポジウムを開催する。

「平成 27 年度かながわ学びづくり推進地域研究委託事業要項」4 事業の実施(2)より

(4) 好事例の発信

県教育委員会の大きな役割の一つは、県内の好事例を収集・発信し、各地域にあった取組の参考としてもらうことにあります。

そこで、次に掲げる各取組により、情報の発信とその周知に努めるとともに、各会議や研修等においても情報を発信していくこととしました。

かながわ学力向上シンポジウム

「かながわ学びづくり推進地域研究委託事業」の推進地域の取組について、かながわ学力向上シンポジウムでその取組を全県に発信・周知

かながわの学びづくりプラン

<http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/f300518/>

学習指導の工夫・改善、児童・生徒への指導と家庭・地域との連携、学校運営等に役立つ提言を、平成 20 年度から毎年学力向上支援連絡協議会から発信

ポスター発表

平成24年度から、かながわ学力向上シンポジウムでの発表地区以外の研究成果について、ポスターでの情報発信。平成27年度からは、年間を通して総合教育センターに掲示、周知



インターネットでの発信

<http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/f534289/>

平成27年度から、「かながわ学びづくり推進地域研究委託事業」の推進地域の取組について、ホームページを活用した発信

元気な学校通信「はにい」での発信

<http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/f420082/>

平成24年度から元気な学校通信「はにい」を発行（資料4）
授業の場面や学校生活の何気ない一コマをとりあげ、先生と子どもたちとのやりとり、さらには、先生方の日常の取組などを発信

神奈川新聞「教室に行こう」での発信

元気な学校通信「はにい」の取組をさらに広げ、神奈川新聞の紙面に「教室に行こう」を定期的に掲載することで、学校での取組を県民に周知（資料5）

☆ここに注目☆

—「かながわ元気な学校」ネットワーク—

ここで、この「かながわ学びづくり推進事業」を推進していくうえで、基本となっている考え方「かながわ元気な学校」について触れたいと思います。

本県では、いじめ、暴力行為、不登校など児童・生徒が抱える課題に対し、未然防止や早期発見のために、これまでそれぞれの課題ごとに検討組織を設け、各課題に応じた様々な方策を検討し、推進してきました。平成22年度に、問題行動等が起こりにくい学校風土を構築し、結果として、いじめ・暴力行為や不登校の減少を目指すため、これまで取り組んできたすべての事業を見直し、再構築することとしました。結果、事業を3つのプロジェクトに整理し、併せて、産・官・学・民の協働による「元気な学校ネットワーク推進会議」を立ち上げ、この会議を推進母体として取組が始まりました。

3つのプロジェクトとは、「1 魅力ある学校づくり推進プロジェクト」「2 支え合う地域との協働推進プロジェクト」「3 いのち守り合う関係機関との連携推進プロジェクト」です。それぞれのねらいとして、「1」のプロジェクトは問題行動等の未然防止を、「2」のプロジェクトは社会性・規範意識の育成を、「3」のプロジェクトは問題行動の長期化・重大化防止を掲げています。

「1」の「魅力あるプロジェクト」では、子どもたちや先生方にとって、何よりも一番大事なものは授業であり、その授業が充実し、子どもたちに楽しみや意欲を与えることができれば、子どもが元気になり、先生方も元気になり、結果、学校や地域が元気になるという好循環を生み出すと考え、「かながわ学びづくり推進事業」を位置づけ、取組を進めてきました。

「かながわ元気な学校ネットワーク」を推進する上で、重要なポイントはいくつかありますが、その一つとして指導主事の役割があげられます。県の指導主事はミツバチのように出向き、学校が頑張っていることや、教職員のアイデア、実践の価値をしっかりと言葉で意味付け、そのことを保護者や地域、さらには他の地域へ発信することです。

資料4に掲載した元気な学校通信「はにい」はこうした考えから生まれたものです。

併せて、市町村教育委員会が主体となって取組を進めることが何よりも重要な視点です。学びづくり推進事業が結果として、政令市・中核市を除く全ての市町村で実施できたことは、大きな成果と捉えています。

(5) 平成20年度から平成27年度までの「かながわ学びづくり推進地域研究委託事業」の推進地域での取組の概要

平成20年度から始まった「かながわ学びづくり推進地域研究委託事業」は、平成27年度で、政令市・中核市を除く県内全ての市町村が実施したことになります。

この取組の大きな特徴は、各地域で独自の方針・方策を考え、それを県内へ発信し共有するという、ボトムアップ型のものであることです。推進地域では、「講師を招聘しての研究」「地区内に開かれた公開研究会」「研究協議会の工夫」「市町村教育委員会発の地区版『学びづくり通信』の発行」「『家庭学習の手引き』の作成・配付」など、子どもや地域、学校の実態に応じて、創意工夫を生かした取組がなされてきました。

次のページからは、これまで学びづくり推進地域に指定し、実践研究に取り組んだ市町村の内容を紹介しています。

| | |
|-------|------------------------------|
| (記載例) | 推進地域名 (指定年度) |
| | 太字下線は研究テーマ ◇ 取組内容、○成果、●課題 |

市町村による取組

中井町 (H20~H21)

達人教師と学び続ける子どもたちを目指して～確実な学びをつくる指導の工夫～

◇研究協議の工夫

- ①小グループ協議 ②付箋紙協議 ③模造紙協議 ④授業の写真を掲示する等、時系列で授業を検討。板書についても検討。

◇授業改善の工夫

- ①生徒による授業評価や研究協議への参加
②事前に模擬授業を行いチームで授業を作り上げる。板書計画や、発言の引き出し方などについても協議
③教科部会での指導案検討。

成果 (○) と課題 (●)

- 教科を越えた意見交換が活発になり、互いに高め合う教員集団が作られた。
○協議での各教員の発言が、授業の本質に迫る質問や提言になり、授業を見直す契機となった。
○意欲的に授業公開をする教員も現れ、児童・生徒の多様な考えが生み出されるような教材の工夫や教材の提示の工夫、児童・生徒の考えを把握するための座席表の利用など、児童・生徒の思考を大切にした授業が展開された。
●児童・生徒に、あきらめずに取り組む姿勢を身に付けさせることや、学習の習慣化を促すこと、といった課題は、継続的に取り組むべき課題である。

大和市 (H21)

「自ら成長する力を育てる」 ～授業改善と学校・家庭・地域の連携

- ◇授業改善の取組
 - ・小中連携授業研究と分科会の開催、学習の連続性や、地域的な共通性を研究
 - ・中学校から小学校への出前授業の実施
- ◇家庭生活の見直しと家庭学習の向上
 - ・家庭と協力して推進する家庭学習システムの構築
- ◇社会性と集団意識の醸成
 - ・行事における小中の交流

成果 (○) と課題 (●)

- 「学び」を地域の視点から捉えることで、教職員の視野を広げられた。
- 小中の連携がより強固なものになり、スムーズな協働と交流ができた。
- 「家庭学習システム」の取組の検証

三浦市 (H21～H22)

「一人ひとりに生きる力の育成を」 ～確かな学力保障を目指して～

- ◇学校研究の充実
 - ・講師を招聘した授業研究会の実施
 - ・研究発表会の開催
- ◇小中連携の充実
 - ・中学校区での研究会による小中の相互交流
 - ・学校行事における児童・生徒の交流
- ◇家庭との連携の充実
 - ・PTA協議会との共催による講演会開催

成果 (○) と課題 (●)

- 外部講師の助言により研究会の質の向上
- 生徒1人1人など協議会の工夫による研究会の活性化
- 日常的な小中での授業交流の検討
- 家庭学習の習慣化に向けた取組の検討

平塚市 (H21～H22)

思考力・判断力・表現力の育成のための 単元開発と指導方法の改善

- ◇小中合同研究会を通じた、学力のとらえ、授業づくりについて相互理解、情報共有
- ◇全員が指導案を作成、授業公開
- ◇先進校への視察

成果 (○) と課題 (●)

- 教員の授業づくりに対する意識の変化
- 生徒の家庭学習への意識の変化
- 授業研究会の取組に変化
- 参観者主体の協議スタイルに変容
- 研究協議のファシリテーターの育成
- 学習習慣の確立に向けた具体的な手立てへの取組

箱根町 (H21～H22)

学び合う、高め合う教師と子どもたちを めざして ～授業力向上、校内研究体制の改善・充実～

- ◇授業力の向上
 - ・基礎的・基本的な知識技能の習得～「箱根ミニマム」や家庭学習の手引きを活用
 - ・先進校への視察による情報収集
- ◇校内研究の充実
 - ・継続した講師招聘による研究会の実施
 - ・付箋紙やビデオを活用したワークショップ型の協議会の実施

成果 (○) と課題 (●)

- 多様な考えを認める授業や授業規律の共通理解などによる、授業の雰囲気的好転、学ぶ意識の向上

清川村 (H21～H23)

①家庭と地域・学校とが連携した生活習慣の確立

②幼・小・中で連携した発達段階に応じた指導

③学校における指導方法の工夫と改善を目指して

◇きよかわ学びづくり推進連絡協議会
・学校と家庭・地域が連携した生活習慣の確立に向けた懇談会等の開催や通信等の発行物による発信

◇幼小中の連携
・発達段階に応じた、より効果的な連携と指導の充実

成果(○)と課題(●)

○外部講師の招聘による授業研究会により、教職員の授業力が向上

○異校種間の連携を図りながら研究を進めたことで、教育環境や教育方針等の共通認識を持てた。

●充実した授業研究協議会を更に深めるワークショップ方式等の工夫と改善を図る。

山北町 (H23)

確かな学びに通じる“質の高い授業”をめざして

◇科学的な視点からの授業づくり
・課題提示の仕方や工夫
・発話分析による教科を越えた取組

◇協議会の工夫
・付箋紙協議会 ・小グループ協議会
・校種を越えて共通した視点による授業参観、協議の実施

◇「山北町学びづくり通信」の発行

成果(○)と課題(●)

○今後の授業づくりの指標となる研究を行えた。

○小中で共通した視点をもった授業研究を行ったことが、指導の連携につながった。

○「学びづくり通信」により、園・各校の研究会の様子、指導助言等を情報提供

●課題に対する研究の継続

●学年間の連携及び校種間での連携

返子市 (H23～H24)

小学校：自分から進んで取り組む子を育てる～自分の考えを表現できる子をめざして～

中学校：自ら学び考え、行動できる力を育てる～意欲・自己肯定感を高め、言語活動を基に思考力を高める授業づくりを目指して～

◇一小一中学区である沼間小・中学校区

沼間小 発問の工夫、シンキングツール、話し合い活動

沼間中 学級づくり、地域・保護者との協働した取組

成果(○)と課題(●)

○校内研究を核とした学校づくりが進み小・中連携及び地域連携が深まった。

●構築した「授業スタイル」の検証

寒川町 (H23～H24)

豊かな心と確かな力、瞳輝く寒川の子～確かな学力を身につける教育の推進～

◇学校研究の充実
・授業力の錬磨
・相互の学び合い
・一致した指導体制

◇町をあげての授業研究体制の構築
・公開研究会で校種を越えた交流
・教職員研修会、教育講演会、教育研究員研究会等の開催

◇家庭での学習習慣の形成

成果(○)と課題(●)

○教員の授業改善、研究に対する意識の向上

●学力向上に関する検証を生かした学校全体としての改善

綾瀬市 (H23～H24)

児童・生徒がいきいきと学ぶ姿をめざして

- ◇各学校における授業改善
- ◇各学校における授業研究の活性化
- ◇児童・生徒の学習習慣、生活習慣の改善

成果 (○) と課題 (●)

- 起床、朝食、家庭学習、就寝の時間を固定する「四点固定」の取組により、学習習慣、生活習慣が改善
- 「言語活動の充実を図る学習活動段階表モデル」の作成
- 「家庭学習の手引き」作成、配布
- 研究成果の市内各校への拡充
- 家庭での学習習慣・生活習慣の確立に向けた取組の継続

座間市 (H24)

豊かな心の育成をめざして

- ◇推進校区内における授業研究会・研修会・講演会の相互交流
- ◇校区内での授業観の共通理解

成果 (○) と課題 (●)

- 「聴く」姿勢やコミュニケーション能力、さらに論理的な文章を書く力の育成に力点を置く授業を、重視していくようになった。
- 「ざま学びづくりプラン」による取組の発信により、教員の共通理解が深まり、保護者からの理解も得られた。
- 他校の校内研究を相互に見合うための時間確保
- 家庭学習や児童・生徒指導など、学校間の連携が有効である取組についての継続

秦野市 (H23～H24)

伝えあい・学びあう子どもの姿をめざして～3つの連続性の視点から～

- ◇遊び・学びの連続性
教育内容の系統性を重視し、連続性のある学習活動を保障する。
- ◇“豊かな育ち”の連続性
校種を越えて、子どもの成長を見つめる。
- ◇“指導”の連続性
教職員研修を通し、相互理解・共通理解を深める。

成果 (○) と課題 (●)

- 教職員の意識向上
 - ・交流を通して、共に地域の子どもを育てるという意識
 - ・連携・交流活動の活性化
- 学力向上のための幼小中一貫教育推進に向けたカリキュラムの編成、実践、検証、改善

伊勢原市 (H23～H24)

確かな学力の育成のために～授業力の向上をめざして～

- ◇他校に向けて開かれた校内研究会
- ◇9年間を見通した教育活動の充実
- ◇年次教員研修の充実

成果 (○) と課題 (●)

- 教科、学年、世代、校種を越えて、授業づくりや評価、児童・生徒指導について語り合う風土、学び合う教員集団
- 学びの連続性への教員の意識向上
- 5年次教員までを対象とした新採用教員等担当者会議設置による、OJTと連動した研修体制
- 付けたい力を明確にした授業づくり、学習評価の妥当性と信頼性を高める組織的な取組

大井町 (H22～H24)

質の高い授業の創造
～考える力を育てる授業づくりと人間としてよりよく生きるための道徳観の育成をめざして～

- ◇確かな学力の向上を図るための授業の工夫・改善
- ◇知識・技能を活用し、考える力を育てるための授業の構築
- ◇道徳教育の充実

成果 (○) と課題 (●)

- 既習事項を活用した「足場」のある授業
- 話し合い活動の工夫
「話し方ノート」の掲示、ペア学習、グループ学習の導入
- 協同学習の工夫
- 道徳教育
指導方法の工夫、道徳環境の充実、自作資料の作成、12年間を見通した子どもの育ちに沿った指導

小田原市 (H23～H24)

学習習慣や望ましい生活習慣の定着に向けた家庭・地域との連携・協力の推進
～小・中学校の連携を通して～

- ◇スクールボランティアと連携し、基礎学力の向上、読書に親しむ態度を育成
- ◇校内研究の充実
- ◇家庭学習、基本的な生活習慣の定着
- ◇学習に対する意識調査、hyper-QU調査による学級状態の把握

成果 (○) と課題 (●)

- スクールボランティアとの協働による学習環境の向上。
- 校種を越えた授業交流により、良さや課題の共有、授業改善、中間ギャップの軽減等が図れた。
- 調査結果を学習指導とともに、安心して学べる学級づくりに役立てられた。
- 家庭での学習時間の目標は一律に設定することは難しかった。

松田町 (H24～H25)

分かる喜びのある授業の創造
～見て聴いて 考えて つなぐ学習をとおして～

- ◇授業の工夫・改善
- ◇研究会の充実

成果 (○) と課題 (●)

- 言語活動を中心とした授業づくり
 - ・「話し方」「聴き方」の指導
 - ・課題設定の工夫
 - ・「一人学び」の時間の充実
 - ・「分からない」ことから始める解決
 - ・「見て聴いて 考えて つなぐ」話し合い
 - ・教員の出番の見極め
 - ・教具、授業形態の工夫
- 研究会の充実
 - ・研究授業に対する意識の变革
 - ・事前検討の実施
 - ・多様なスタイルの研究会
 - ・小中学校教員の相互参加
- 話し合い全体の質の向上
- 「書く」ことに視点を当てた取組の推進
- 全国学力・学習状況調査、県学力学習状況調査の結果活用

湯河原町 (H23～H25)

児童・生徒の学力向上をめざした、学び合い、認め合い、高め合う授業のありかた

- ◇授業改善
 - ・講師を招聘した授業研究会の実施
 - ・湯河原町郷土研修による地域教材の活用
- ◇家庭教育力の向上
 - ・「家庭教育学級」の開催
- ◇生徒指導機能の活用
 - ・学校サポート会議の開催
 - ・hyper-QUの実施・分析
 - ・湯河原町子どもフォーラムの実施
- ◇支援教育への取組
 - ・支援教育アドバイザーの派遣
 - ・担当者会議の開催

成果 (○) と課題 (●)

- 教職員が授業研究に向き合い、よりよい授業を創ろうとする姿勢が多く見られた。
- 学校と家庭・地域と「学び」の方向性について、すりあわせができた。
- 異校種間交流の更なる活性化の工夫

茅ヶ崎市 (H25～H26)

豊かな人間性と自律性をはぐくむ学校教育の充実 ～学びの質を高める学校教育の充実～

- ◇学びの質を高める授業づくり
- ◇校内研究・研修の充実
- ◇小・中、地域・家庭の連携

成果 (○) と課題 (●)

- 教員の授業改善への意識が高まり、思考力・判断力・表現力を育てる授業づくりが実践された。
 - ・指導案検討
 - ・付けたい力を明確にした単元構想
 - ・言語活動の工夫
- 校内研究の活性化
授業研究会の交流、小・中の交流
- 研究推進の継続、発信の工夫

葉山町 (H25～H26)

一人ひとりに確かな学力を育む学習指導法の工夫

- ◇葉山町学びづくり研究推進委員会を中心に、町全体で研究を進めた。
- ◇校内研究の充実、公開授業の実施
 - ・講師を招聘した研究会の実施
 - ・研究会への相互乗り入れ
- ◇小中連携の充実

成果 (○) と課題 (●)

- 学校間連携・小中連携の取組が進展
- 小中学校の共同研究への意識の向上
- 平成 27 年度から町事業として学びづくりを実施
- 家庭学習の充実

厚木市 (H25～H26)

小・中学校9年間を見通した「確かな学力」の育成

- ◇「言語活動の充実」と「自主的な家庭学習」を推進校共通の研究の柱に設定

成果 (○) と課題 (●)

- 児童・生徒理解や発問、教材教具、指導過程の工夫等、授業改善に向けた具体的で深まりのある授業研究
- 小中合同で制作した“STEP UP 家庭学習”を中学校区の各家庭に配布し、発達段階に合わせた家庭学習を支援
- 児童・生徒の実態に基づいた、学力向上に向けた PDCA サイクルの確立
- 家庭学習の習慣化や質的向上、生活習慣の見直し、地域での体験活動の充実など、家庭・地域との連携

二宮町 (H25～H26)

考える力を育てる、質の高い授業づくり～言語活動の充実～

- ◇各校における校内研究の充実
- ◇他校の校内研究会への参加
- ◇人材育成
- ◇全国学力・学習状況調査等の結果の活用

成果 (○) と課題 (●)

- これまでの「特色ある学校教育推進プラン」町研究指定校（小・中各1校）に補助金（2年毎）から、「二宮町学びづくり推進研究事業」として、小・中学校5校にそれぞれ補助金を供出
- 研究推進委員会の実施、予算書・計画書等の作成、他校への参観体制や情報発信等

開成町 (H25～H26)

伝え合い、学び合う授業をめざして

- ◇思考力・判断力・表現力を育てるための授業の工夫・改善について
- ◇幼小中の系統的な学びを意識した研究
- ◇教員の資質向上を目指した研究会

成果(○)と課題(●)

- 子どもたちの実態を把握することからの身に付けたい力の明確化、目標と教材の工夫、評価規準の明確化、言語活動を重視した授業づくり
- 子どもの実態、付けたい力を明確にした授業づくり
- 指導と評価の一体化と言語活動を重視した授業づくり
- 「話し方・聞き方」の系統表の作成、検討、活用
- 校種を越えた授業研究会、協議会の工夫

真鶴町 (H25～H26)

確かな育ちを支える幼(保)小・中連携教育

- ◇授業改善
子どもが主体的に学習を進め、考えるための教員の働きかけ、表現し合う場の設定等
- ◇基礎基本の定着・学び直し
支援スタッフによる個別指導、試験前や夏季休業中の「学び直し教室」
- ◇言語力・自尊感情・社会性・道徳性の育成、QI等の結果の小中での共有
- ◇幼・保「アプローカリキラム」、小「スタートカリキラム」等の接続カリキラムの作成、見直し

成果(○)と課題(●)

- 幼保小中の子どもたちをつなぐ取組
- つながりを意識することで、子どもが主体的に学ぶ授業を実現できた。
- 授業にかかわる幼小中の系統をより深める。
- 地域・家庭との連携をさらに進める。

平成27年度の取組

鎌倉市

小・中学校9年間を見通した思考力・判断力・表現力を高める

第二小・中学校で、両校の教育目標を踏まえ、「主体的に学び、考え、表現する児童・生徒」を目指す子ども像とした。9年間を見通した指導の充実を図り児童・生徒の学力向上と教員の授業力向上をねらいとし、小中連携の取組の一層の充実を図り、研究に取り組んでいる。

◇学びづくり小中合同研究会（年3回）

第二小・中学校長、各校推進委員により運営されている。研究テーマの設定、グランドデザインの考案、各校の実践を報告し情報を共有、小中合同の授業参観（年1回）や講演会（年2回）を企画立案した。

◇第二小学校

「『伝えあおう心を！』～思考力・判断力・表現力を高める言語活動の充実～」

主に、国語科・算数科を中心とした、授業研究を行った。昨年度までの国語科の「話すこと・聞くこと」領域の研究を継続させながら、「書くこと」領域の研究に発展させた。国語科で培った「聞く」力、「話す」力、「書く」力を生かし、算数科を中心に、他教科の言語活動の充実を図る研究を進めた。「聞く力」をはぐくむため、帯単元を設定し、聞き取り学習、語り読み・読み聞かせ活動を行った。講師来校研究授業（年6回）、講演会（年2回）を開催した。

◇第二中学校

「『生きる力を育む』～思考力・判断力・表現力の育成につながる言語活動の充実を目指す～」

- ・生徒の学力向上に向けて…主体的に学習に取り組む態度を育むための「TRY TRY ノート（家庭学習ノート）」・「TRY TRY タイム（昼休み自習時間）」、基礎的・基本的な知識・技能の習得のための「朝スタ（朝学習）」や「サポートタイム（大学生ボランティアによるテスト前の学習支援）」を実施した。
- ・教員の授業力向上に向けて…思考力・判断力・表現力の育成につながる言語活動の充実を目指し、全教員による相互参観研究授業（年2回／1人）、講師来校研究授業（年6回）や講演会（年2回）を実施した。

○小・中学校9年間を見通した共通の目指す子ども像・テーマを具体化したことで、児童・生徒の学びの姿や目指すべきゴールを見据えて小・中学校が具体的にそれぞれの研究を進めることができた。

○講師や指導主事による指導・助言や講演会、附属鎌倉中学校との合同研究会により、研究内容の充実が図られたり、教員が学ぶ機会が増えたりしたことで授業改善に対する教員の意識が一層高まった。思考力・判断力・表現力の育成に向けて、指導方法の工夫や実践の充実が図られた。

●小・中学校それぞれの今年度の取組を踏まえ、来年度は9年間を見通した発達や学びの系統性を確認しながら、小学校から中学校へと思考力・判断力・表現力の高まりを重視した実践を行い、小中の連携を深め、研究を進める必要がある。

平成 27 年度の取組

藤沢市

楽しい授業、楽しい学校づくりにより自己肯定感を高め、学力・学習状況を改善させる

市の学校教育の方針である「一人ひとりの子どもたちの笑顔があふれ 夢や希望にむかう意欲を持つことができる学校」の実現に向け、小中一貫教育を視野に入れ、子どもたちの自己肯定感を高めることを目指し、「楽しい授業、楽しい学校づくりにより自己肯定感を高め、学力・学習状況を改善させる」をテーマに研究に取り組んだ。「授業改善」と「体験活動の充実」の2つを柱に、児童・生徒と教員がともに自己肯定感を高められる活気ある学校づくりを推進した。

◇授業改善に向けた月 1 回程度の授業研究会、及び、講演会、討論会の開催

オープンエンドの課題に対し、試行錯誤を大切に生徒が自ら考え、根拠を明確に自分の言葉やパフォーマンスで表現したり、仲間と相談したりして学び合うことを各教科で大切にするという方向性を確認した。また、記述式のアンケートやシンポジウムでの意見交換を行うことで生徒の生の声を授業改善に反映させることに取り組んだ。さらに、学識経験者を招聘しての講演会や学力向上に向けたシンポジウムを継続的に開催した。

◇小中一貫の理念を基にした授業づくり、言語活動の充実や思考力・判断力・表現力の育成等に向けた指導方法や児童・生徒の学び方の連携

◇中学校教員による小学校への出前授業、中学生による小学生への絵本の「読み聞かせ」や学習支援を行う「寺子屋」、文化祭などでの作品交流、小学生の中学校体験授業や部活動体験、小・中学校教員等による学びづくりを語る会の開催を通じた小中連携・交流の積極的推進

◇体験活動の充実と小中連携

総合的な学習の時間を中心に取り組む様々な体験活動を自己有用感や自己肯定感を育む大切な機会と考え、小中連携も含め多様な取組を行った（東日本大震災復興支援「ひまわりプロジェクト」、日本非核宣言自治体協議会設立30周年記念大会での発表、ユニセフ・キャラバン・キャンペーン、学校アート化プロジェクト）。

◇研究を通じた若手教員の育成

善行中の研究推進委員は「経験年数6年未満」で構成した。研究推進委員が積極的に研究授業を行うことに重きをおき、共通の空き時間を時間割に設定して毎週日中に研究推進委員会を開催し、教科の枠を越えて指導案検討に取り組んだ。

○学びづくり研究の推進校となったことをきっかけに、小中連携の数々の取組が実現した。

○地域との連携による「ひまわりプロジェクト」を始め、非核協記念大会での平和学習発表やユニセフ・キャラバン・キャンペーンの経験は、自己肯定感の育成に寄与した。

○全国学力・学習状況調査結果の教科面のすべて、及び、質問紙調査において、大幅な改善が見られ、学力改善の背景として、生徒の意識の変容が大きく関わっていることが伺えた。

●今後の継続的な取組に向け、成果と課題についてじっくりと検証していくこと。

●家庭学習の充実や、小中一貫での学力向上の充実。

平成27年度の取組

寒川町

確かな学力を身に付ける教育の推進

～豊かな心と確かな力 瞳輝く寒川の子～

寒川町全小中学校（小学校5校、中学校3校）での取組。「①校内研究の充実 ②全町的な研究体制 ③パイロット校における開発的研究・研究推進校における先行研究」を柱に研究を推進している。

◇各校のこれまでの研究の流れを尊重し、各校の研究テーマ、内容を決定した。各学校で実施された講師を招聘した研究会・講演会は町内小・中学校教職員に向けて公開し、協同した研究会とした。

◇さむかわ学びっ子育成事業研究推進委員会を中心に全小中学校教職員の参加可能な日程調整を行い、公開研究会、公開講演会、全体研究会を全小中学校が連携・協力して実施した。

◇学習補助や家庭における学習習慣の確立に向けて、各校における補充学習への取組や、基礎力定着度確認問題の全校全学年での実施と活用、小学校学力向上補助教材の活用、学習支援システム「eライブラリ」の導入と活用、読書活動・家庭学習の推進の取組を行った。

◇学校・家庭が共に関わる喫緊の課題について、教職員・保護者向けに講演会を実施した。

- ・「児童生徒のネット依存について」 講師 中山秀紀 久里浜医療センターネット依存治療研究部門)

◇委員会主催の教職員研修会、教育講演会を実施した。

- ・「『教えて考えさせる授業』による学力向上」

- 講師 市川伸一 東京大学大学院教育学研究科教授

- ・「学ぶ意欲を育むための授業改善と学級経営」

- 講師 小林宏己 早稲田大学総合科学学術院教授

- ・「『子どもの好奇心を培う』思考力を深める授業づくり～算数・数学をとおして～」

- 講師 坪田耕三 青山学院大学教育人間科学部特任教授

- ・「教室で困っている子どもたちへの支援と方法について」

- 講師 花輪敏男 FR教育臨床研究所所長

○全小中学校教職員の参加を可能とした公開研究会を各校最低2回は実施したことで、町内8校の相互交流を図り、各校の校内研究の推進と発信、他校の研究から学ぶ体制を作り上げた。

○各校の取組状況について、さむかわ学びっ子育成事業研究推進委員会を中心に情報交換や研究協議を行い、成果と課題を互いに共有した。

- 28年度は、全町的な研究体制を構築し、「さむかわ学びっ子育成事業研究推進委員会」を中心に研究成果の発信・発表を行う。

- パイロット校を設定し、「教えて考えさせる授業」の研究を推進する。

平成 27 年度の取組

海老名市

小中一貫教育による『確かな学力』の育成

・教育委員会事務局と連携し小中一貫教育を推進する中で、「9年間を見通した学び」について研究している。

・「課題等の分析」「研究計画作成」「研究実践と検証」に取り組んでいる。

＜学びのつながりを創るための取組＞

◇4校教員による合同研修会「小中一貫教育スタートアップ研修会」を実施し、小学校教員による中学校授業参観、大学教授による講演、教科等に分かれてのグループ協議を行った。

・「小中一貫スタートアップ研修会」

講師 小林宏己 早稲田大学総合科学学術院教授

・「小中一貫における学びづくり」

講師 池田敏和 横浜国立大学教育人間科学部教授

◇中学校教員による有馬小学校、門沢橋小学校、社家小学校への「乗り入れ授業」をそれぞれ週数回程度行った。＊美術の教員が毎週決まった曜日に小学校へ行き、数時間ずつ授業を行った。

◇推進校同士が相互に校内研に参加するとともに、全教員が2年間で最低1回は参観することを目指した日常的な授業参観を行ったり、中学生の美術・家庭科等の作品を小学校で展示したりした。また、市内県立高校の職員による個別授業参観も行った。

＜人のつながりを創るための取組＞

◇児童・生徒の交流として、中学生による小学校訪問（学校説明会、運動会、サマースクールにおける吹奏楽部の演奏、朝のあいさつ運動）、小学生による中学校訪問（中学校体験入学、行事等の見学）、小学生同士の訪問（学習発表会、「総合」の相互発表会）を行った。

◇教職員のスポーツ交流会 学校対抗戦と懇親会

◇地域との連携 保護者・地域講演会 千葉大学 天笠茂教授による小中一貫教育の講演会

○市内全域

○小中一貫教育の必要性を再確認するとともに、小・中学校のよさや違いについて教員全体が考え始めた。

○児童・生徒にとって有効な交流ができた。

●研究2年目である次年度は授業等についてより深い話し合いを行い、具体的な学びのつながりを探っていく。

●次年度は中学生全員が関われる交流、地域との連携を進める。

平成27年度の取組

綾瀬市

児童・生徒がいきいきと学ぶ姿をめざして

学校と家庭との連携による学びの環境の整備や効果的な教科指導の在り方について、春日台中学校・落合小学校・土棚小学校の3校を実践研究推進校に指定し研究を進めた。

◇各学校における授業改善

- ・単元を見通した学びのプロセスをつくる～本時案（指導案）に加えて「単元構想シート」を作成する（全職員）とともに、単元と単元、授業と授業をつなげた。
- ・生徒側の視点（生徒の問い）に立った単元構成や本時案の展開を考えた。

◇各学校における授業研究の活性化

- ・推進校の研究日程を公開し、小中の教員が互いに授業を参観し、協議で意見交換を行った。
- ・実践研究推進校の3校では、イントラネットワーク内の市内共有フォルダーを活用し、各校の校内研究の取組や、校内研究だより等の情報を共有した。
- ・班別協議により事前に単元構想シート・学習指導案の検討をした。
- ・学習指導案作成前に、授業について検討会を行った。児童の実態、付けたい力、教材の特性の関連を多面的に議論した。
- ・事前に設定した視点から授業の改善点を見出し、学習指導案をもとにしながら、よりよい授業を行うためのアイデアを出し合い、「ネクスト・プラン」を作成する協議会を実施した。

◇児童・生徒の学習習慣・生活習慣の確立

- ・「四点固定」の取組～児童・生徒の学びを深めるためには家庭学習や規則正しい生活が習慣化されることが重要であると考え、「起床時刻」「朝食を食べる」「学習を始める時刻」「就寝時刻」についてチェックリストを活用しながら学校と家庭が連携した学習習慣・生活習慣づくりを進める実践を行った。
- ・家庭学習の推進～実践研究推進校では、家庭学習に主体的に取り組む習慣が付くよう小学校では、「コツコツ・ワクワク家庭学習表」を、中学校では「マイプラン」の見直しと「学習時間タワー（教科ごとの累計学習時間）」を新たに加え自主的な学習を促した。
- ・家庭学習を推進するにあたり、「実践研究推進校の学びづくり」や家庭学習の意義について記載した学校だより等を推進校の保護者へ配布した。

○小中学校の教員が共に研究協議を行うことで様々な視点から協議を深めた。

○「言語活動の充実を図る学習段階表モデル」を作成し、全教員へ配布した。

○イントラネットワーク内で校内研究だよりや公開授業の日程を共有することで、お互いの研究について知ることができ、授業を参観する機会も増えた。

○従来の「生活リズム大作戦」、「マイプラン」を継続するとともに、家庭学習の取組の在り方について検討し、「家庭学習の手引き」（教職員用リーフレット）を配布した。

●小中学校で研究を交流させることが、発達段階にあったスムーズな学習習慣の移行のためには必要であることから、今後も、よりよい連携の在り方について考えていく必要がある。

●「生活リズム大作戦」や「マイプラン」の取組を生活習慣や学習習慣の確立につなげていくためには、継続的な指導や家庭との連携を図ると共に、児童・生徒が主体的に取り組みたくなるような家庭学習の在り方についても検討していく必要がある。

平成27年度の取組

愛川町

校内研究を中心とした授業改善による愛川町の子どもたちの学力向上及び家庭・地域・学校連携による基本的な生活習慣の確立を目指す

授業改善による子どもたちの学力向上及び家庭・地域・学校連携による基本的な生活習慣の確立を目指し、愛川東中学校区の3校（中津小学校・菅原小学校・愛川東中学校）の校内研究を中心として研究をすすめている。

◇中津小学校

「ユニバーサルデザイン化の視点を踏まえた国語科授業づくり

～全ての児童が「わかる・できる」ようになるために～

- ・「授業づくりの工夫」と「個別の支援」という2つの方向から研究にアプローチしている。児童のつまずきを予想しながら、単元の指導計画を考え、授業における全体への指導の工夫を考えた上で、毎時間の目標を実現させるための授業の山場を考えた教材研究をしている。
- ・「授業づくりの工夫」として、「焦点化」「視覚化」「共有化」の3つの要件で授業を組み立てている。
 - ①焦点化（シンプルに）する。⇒ ねらいや活動をしぼる。
 - ・指導のビジョンを持つ。　・教材に仕掛けをつくる。
 - ②視覚化（ビジュアル化）する。⇒ 視覚的な理解を重視する。
 - ・とらえにくいイメージや文章構成を考える時に分かりやすく見えるようにする。
 - ・視覚的な手がかりによって問いの幅を広げる。
 - ③共有化（シェア）する。⇒ 一人の考えの良さを他の児童に伝える。
 - ・表現せざるを得ない状況をつくる。　・ペアの活動を効果的に取り入れる。

◇菅原小学校

「ことばを大切に、確かな読みができる子どもの育成」

児童に「正確に読む力」を付けるために、国語科において、文章の言葉一つひとつや言葉どうしのつながりを大切に学習の研究を進めている。

- ・音読を学年の発達段階に応じて、授業の中に取り入れる。⇒ 音読のねらいを明確にする。
- ・語彙力を付けるための活動の工夫をする。⇒ 学んだことが日常的に使えるような環境づくりを行う。
- ・根拠を明らかにした読み取りを行う。⇒ 自分の考えを持つときに、本文を意識させる。

◇愛川東中学校

「自ら学び、力を伸ばし、その手応えを感じることでできる生徒の育成～聴いて、考えて、つなげる授業を目指して～」

- ・授業者が、学習指導要領の趣旨を理解して「付けたい力」を明確にし、「言語活動の充実」を図る「聴いて、考えて、つなげる授業」を目指すべき授業として研究を進めている。「言語活動の充実」＝グループ学習という形式的な考えから脱却し、より内容の伴った「聴いて、考えて、つなげる授業」を目指すべく、その実現のために日常から意識していかなければならないことや、充実した言語活動を展開するために、日々の授業の中で、子どもたちに身に付けさせなければならない知識・スキルは何かを先進実践事例等から学び、実践に結び付けている。

平成27年度の取組

大磯町

みんなで取り組む日常授業の改善

町内全小・中学校（2小2中）での取組。研究の成果を日常の授業に反映させることをねらっている。各校の学校研究テーマを生かしながら、町全体として「日常授業の改善・充実」に取り組んでいる。各中学校区においては、研究内容や研究方法の交流を図りながら、小・中が連携して学びづくりを進めている。

- ◇大磯小学校の取組 「すべての子がいきいきと学べる学校づくり～ユニバーサルデザインを生かして～」
 - ・「本から学ぶ」「他校の実践から学ぶ」「講師から学ぶ」を通し、教員にできることを考え、次の実践につなげた。
 - ・講師の師範授業及び講演を通し全体で共通理解を図り、年度末の公開授業研究会に向けて学年を単位として指導案検討を重ねた。
- ◇国府小学校の取組 「豊かな表現力を持つ子どもの育成～自分の思いや考えを伝え、他者の思いを受け止められる子の育成～」
 - ・Y-Pアセスメントによる子ども理解、アセスメントを活用した学級づくりに取り組んだ。
 - ・子どもの実態に即した課題を見だし、学校全体で組織的に課題解決に取り組んだ。
 - ・「学びの構え」の充実、「主体的に学びに向かう授業づくり」「ともに学び合う授業づくり」を踏まえた研究を行った。
- ◇大磯中学校の取組 『みんなが、「支え合い・認め合い・学び合う」授業づくり』
 - ・日常授業の改善を目指し、職員に負担を感じさせない研究を心がける。
 - ・「目指す授業の方向性」を職員全員で再確認する。
 - ・教科を越えたグループで研究を進める。各グループで指導案を作成する。
- ◇国府中学校の取組 「豊かな人間関係をはぐくみ確かな学力の育成をめざして～学びを中心とする授業づくり～」
 - ・「主体的に学びに向かう生徒が育つ授業づくり」「基礎基本に基づいた発展のある授業づくり」「ともに学び合う生徒が育つ授業づくり」を踏まえた研究。
 - ・Y-Pアセスメントによる生徒理解。
 - ・校内研修会の改善から授業改善へ。
- ◇各校での研究内容や研究方法の交流を図るため、学校研究会や地区研修会への相互参加の環境づくりとして共同研究日（年7回）を設定した。
- ◇経験の浅い教員の授業力向上に向け、「ファーストキャリアステージ教員研修会」を実施した。
- ◇目指す授業について学ぶために「教育課題研修会（講師：田村 学 文部科学省視学官）」を実施した。
- ◇小学校にて、日常授業の在り方に関する「テーマ研究会」を開催した。
- ◇4校の研究成果をリーフレット形式にまとめ、全教員へ配布した。
- ◇大磯町ホームページ「NEWS@大磯町立学校」により、学校での教育活動に対する理解を深めてもらうため、家庭や地域に積極的に発信した。
- ◇学びづくりの総括と今後の方向性について学ぶために、「特別講演（講師：高木展郎先生）」を開催した。
- 研究に対して教員が手応えを感じ始め、学校や教員の意識改革が確実に進んだ。
- 学習に向かう子どもの姿が前向きになり、協働して学ぶ姿が増えた。
- 学力の向上という、具体的な変容については課題が残っている。
- 「学びづくり推進地域研究」の成果を大磯スタンダード（仮）としてまとめ、全教員で共有化する。

平成 27 年度の取組

南足柄市

「確かな学力」の向上をめざした指導の工夫・改善

これまで取り組んできた幼稚園・小学校・中学校の連携教育の成果を基盤として、目指す子ども像の具現化に向けた研究を進めた。中学校区を単位としていた研究組織を市全体の組織に変更し、「学力の向上」に重点的に取り組んだ。

◇校内研究への講師派遣～今年度は 12 月までに、小・中学校 9 校で、97 回の指導主事派遣による校内研究会を実施した。市教委、教育事務所の指導主事が参加して助言を行うとともに、11 回の研究会においては大学教授を招聘し、専門的な指導を仰いだ。

◇代表授業・推薦授業～若手教員の増加にともない、学校ごとの研究会では経験豊かなベテラン教員による「優れた実践」を見る機会も少なくなっている。そこで、推進委員会の代表による「代表授業」や校長の推薦による「推薦授業」を実施し、希望した教員が他校の研究会に参加できる体制をつくった。今年度小中併せて 12 回行った代表授業・推薦授業では、多くの教員が「優れた実践」を参観し、学校間・校種間を超えた活発な協議が行われた。

◇学びづくり推進委員会～学校では推進委員会からの発信に基づいた具体的な取組が行われ、その取組が推進委員会に報告される。推進委員会では、その中の効果的な取組を学びづくり通信「匠」などにより各校に発信する。このようなサイクルによって、小・中学校 9 校の「効果的な取組を共有すること」を目指した。

◇学びづくり通信「匠」～研究の方向性を発信するだけでなく、学校における効果的な取組を掲載し、市内の全教員に発信した。

◇「家庭学習の充実」に向けた取組～平成 24 年に「家庭学習の手引き」を作成するなど保護者への発信を行ってきたが、その後の調査において、依然として家庭学習の時間が短いことが課題となった。そこで「家庭学習の取組例」を作成するなど、新たに「家庭学習指導の研究」に取り組んだ。家庭学習の方向性を、①「家庭学習に取り組まないことを家庭のせいにはしないで、学校としてできることに取り組む」、②「思考力等」ではなく比較的取り組みやすい「基礎・基本」の内容を中心に扱う、③提出することが目的になりがちな「宿題」ではなく、課題テスト等と関連づけた「課題」を与えるとした。

○全国学力・学習状況調査の活用～調査結果を PDCA サイクルによる研究の改善に活かすことができた。特に 11 月に市独自の質問紙調査を追加で実施することにより、4 月から 11 月の変容を把握し、一層の研究の改善を図っている。

●来年度以降も研究を継続し、PDCA サイクルによる研究を推進する必要がある。

4 かながわ学力向上シンポジウム

かながわ学力向上シンポジウムは、「かながわ学びづくり推進地域研究委託事業」の取組を中心とした県内の授業研究などを通して、児童・生徒の学力の向上を保障した校内研究の推進とその支援について、事例発表と学識経験者等を交えた意見交換を行い、小・中学校教育の充実を図ることが目的です。

かながわ学力向上シンポジウムは、「かながわ学力向上支援連絡協議会」との共催の形で開催しています。

| | | |
|--------------------------------|------------------------|----------|
| ◆平成 19 年度かながわ学力向上シンポジウム | | 平成 19 年度 |
| 平成 20 年 1 月 16 日(水) 県立総合教育センター | | |
| 基調提案「かながわの学びの現状と課題について」 | | |
| | 横浜国立大学教育人間科学部准教授 | 池田 敏和 |
| パネルディスカッション | | |
| テーマ「現状と課題、今後の改善」 | | |
| コーディネーター | | |
| | 国立教育政策研究所研究企画開発部総括研究官 | 千々布敏弥 |
| パネリスト | | |
| | 横浜国立大学教育人間科学部准教授 | 池田 敏和 |
| | 横浜国立大学教育人間科学部准教授 | 青山 浩之 |
| | NHK エデュケーショナル経営総務室総括部長 | 市川 克美 |
| | 県 PTA 協議会会長 | 細谷 勝利 |
| | 県 PTA 協議会副会長 | 井出 茂康 |
| | 伊勢原市教育委員会指導主事 | 岩田 利通 |

平成 20 年度

| | | |
|--|------------------------|-------|
| ◆平成 20 年度かながわ学力向上シンポジウム | | |
| 平成 21 年 1 月 16 日(金) 県立総合教育センター | | |
| 趣旨説明 「平成 20 年度全国学力・学習状況調査（神奈川県）の結果と分析並びに今後の指導への示唆」 | | |
| | 横浜国立大学教育人間科学部准教授 | 池田 敏和 |
| 第 1 部 事例発表 | | |
| ①かながわ学びづくり推進地域の取組 | | |
| 「達人教師と学び続ける子どもたちを目指して」 | | |
| | 中井町教育委員会指導主事 | 岩淵 和信 |
| ②学校の取組 | | |
| 「自ら学ぶ力を育てるためのグリーンカード」 | | |
| | 海老名市立杉本小学校教諭 | 畠山 倫子 |
| | 海老名市立杉本小学校教諭 | 中村 和樹 |
| ③PTA の取組 | | |
| 「学力向上につながる PTA 活動と家庭の役割」 | | |
| | 県 PTA 協議会副会長 | 永野 康子 |
| 第 2 部 パネルディスカッション | | |
| テーマ「かながわの学びづくりにおける学校と家庭・地域の連携について」 | | |
| コーディネーター | | |
| | 横浜国立大学教育人間科学部准教授 | 池田 敏和 |
| パネリスト | | |
| | 横浜国立大学教育人間科学部准教授 | 青山 浩之 |
| | NHK エデュケーショナル経営総務室総括部長 | 市川 克美 |
| | 県 PTA 協議会副会長 | 永野 康子 |
| | 横須賀市立諏訪小学校校長 | 西田 隆信 |
| | 海老名市立杉本小学校教諭 | 畠山 倫子 |
| | 中井町教育委員会指導主事 | 岩淵 和信 |

平成 21 年度

◆平成 21 年度かながわ学力向上シンポジウム

平成 22 年 3 月 8 日(月) 神奈川県自治総合研究センター

趣旨説明

「平成 21 年度全国学力・学習状況調査（神奈川県）の結果と分析並びに今後の指導への示唆」
横浜国立大学教育人間科学部教授 池田 敏和

第 1 部 事例発表

- ①「一人ひとりに生きる力の育成を」～確かな学力保障を目指して～
三浦市教育委員会指導主事 山田 真也
- ②「幼・小・中が連携して取り組む学びの環境づくり」
清川村教育委員会指導主事 本間 隆司
- ③「生徒が主体となる教育活動の在り方を求めて」
～授業改善と生徒指導を通して～
茅ヶ崎市立鶴が台中学校校長 椎原 久芳
茅ヶ崎市立鶴が台中学校教諭 中島 孝明
茅ヶ崎市立鶴が台中学校教諭 代田 光弘

第 2 部 パネルディスカッション

テーマ「学力向上に向けた、学校と家庭・地域の役割について」

コーディネーター

横浜国立大学教育人間科学部教授 池田 敏和

パネリスト

横浜国立大学教育人間科学部准教授 青山 浩之
県 PTA 協議会副会長 眞壁佐代美
中井町教育委員会教育長 柳万 秀雄
相模原市立鳥屋中学校長 柴田 秀太
中井町立井ノ口小学校教諭 遠藤 友樹

平成 22 年度

◆平成 22 年度かながわ学力向上シンポジウム

平成 23 年 1 月 26 日(水) 県立総合教育センター

趣旨説明 「平成 22 年度全国学力・学習状況調査（神奈川県）の
結果と分析並びに今後の指導への示唆」
横浜国立大学教育人間科学部教授 池田 敏和

第 1 部 事例発表

①かながわ学びづくり推進地域の取組

「小・中連携を生かした授業改善への取組」

平塚市教育委員会指導主事

阿部真佐子

「学び合う、高め合う教師と子どもたちをめざして」

～授業力向上、校内研究体制の改善・充実～

箱根町教育委員会指導主事

多田 滋

②中 1 不登校対策事業委託地域の取組

「小中連携シートを活用した不登校対策」

南足柄市教育委員会指導主事

守屋亜津沙

第 2 部 パネルディスカッション

テーマ「学校・地域・保護者・行政の役割を踏まえた具体的な取組」

～子どもたちの学習環境の向上について～

コーディネーター

横浜国立大学教育人間科学部教授

池田 敏和

パネリスト

横浜国立大学教育人間科学部准教授

青山 浩之

県 PTA 協議会副会長

田村 洋一

平塚市教育委員会指導主事

阿部真佐子

相模原市立大野台中学校長

小塚 牧夫

平成 23 年度

◆平成 23 年度かながわ学力向上シンポジウム

平成 24 年 1 月 27 日(金) 県立総合教育センター

第 1 部 事例発表 かながわ学びづくり推進地域の取組

「質の高い授業の創造」

～考える力を育てる授業づくりと

人間としてよりよく生きるための道德観の育成を目指して～

大井町立大井小学校教諭

府川 健太

大井町立大井小学校教諭

秦 睦美

大井町立大井小学校教諭

高橋 壮芳

「町をあげての学力向上の取組をスタートさせて」

寒川町立寒川東中学校総括教諭

小貫 雅明

第 2 部 パネルディスカッション

テーマ「小・中学校における学力向上に向けた取組の成果と課題」

コーディネーター

横浜国立大学教育人間科学部教授

池田 敏和

パネリスト

横浜国立大学教育人間科学部准教授

青山 浩之

県 PTA 協議会副会長

金澤 真理

大井町立大井小学校長

佐藤 廣理

寒川町立旭が丘中学校長

大川 勝徳

平成 24 年度

◆平成 24 年度かながわ学力向上シンポジウム

平成 25 年 1 月 25 日(金) 県立総合教育センター

第 1 部 事例発表

「児童・生徒がいきいきと学ぶ姿を目指して」

綾瀬市立城山中学校総括教諭

熊本 丈力

綾瀬市立城山中学校教諭

藤本 英志

「切実な問題意識を持ち、友達とかかわり合いながら学習する子どもの育成」

小田原市立三の丸小学校総括教諭

楠 喜久子

「インターナショナルセーフスクール再認証に向けての挑戦」

厚木市立清水小学校長

藍原万里子

第 2 部 パネルディスカッション

テーマ「小・中学校における学力向上に向けた取組の成果と課題」

コーディネーター

横浜国立大学教育人間科学部准教授

青山 浩之

パネリスト

横浜国立大学教育人間科学部教授

池田 敏和

県 PTA 協議会副会長

熊切 豊

小田原市立三の丸小学校長

柳下 正祐

綾瀬市立城山中学校教諭

藤本 英志

平成 25 年度

◆平成 25 年度かながわ学力向上シンポジウム

平成 26 年 1 月 24 日(金) 県立総合教育センター

第 1 部 事例発表 かながわ学びづくり推進地域の取組

「共に学び、共につくる継続的な校内研究」～『確かな学力』の向上をめざして～

二宮町立二宮中学校総括教諭 清水 広

「学びあい 響きあう ちがさきの教育」～質の高い学びをめざして～

茅ヶ崎市立汐見台小学校長

橋本 和男

茅ヶ崎市立松浪中学校長

松本サツ子

茅ヶ崎市立松浪中学校教諭

佐藤 洋

第 2 部 パネルディスカッション

テーマ「小・中学校における学力向上に向けた取組の成果と課題」

～校内の研究推進体制の構築と地域・保護者への発信の在り方～

コーディネーター

横浜国立大学教育人間科学部准教授 青山 浩之

パネリスト

横浜国立大学教育人間科学部教授

池田 敏和

県 PTA 協議会専務理事

熊切 豊

茅ヶ崎市立汐見台小学校長

橋本 和男

二宮町立二宮中学校長

添田 克明

平成 26 年度

◆平成 26 年度かながわ学力向上シンポジウム

平成 27 年 1 月 23 日(金) 県立総合教育センター

第 1 部 事例発表 かながわ学びづくり推進地域の取組

「確かな育ちを支える幼・保・小・中連携教育」

真鶴町立まなづる小学校総括教諭

原田陽一郎

「やらされる校内研」から「やりたい校内研」へ

～若手とともに学ぶ授業力向上～

愛川町立愛川東中学校総括教諭

中村 慎輔

第 2 部 パネルディスカッション

テーマ「小・中学校における学力向上に向けた取組の成果と課題」

～子どもの実態に目を向けて、チームで取り組む学びづくり～

コーディネーター

横浜国立大学教育人間科学部教授

青山 浩之

パネリスト

横浜国立大学教育人間科学部教授

池田 敏和

県 PTA 協議会専務理事

一瀬 和広

真鶴町立まなづる小学校総括教諭

原田陽一郎

愛川町立愛川東中学校総括教諭

中村 慎輔

平成 27 年度

◆平成 27 年度かながわ学力向上シンポジウム

平成 28 年 1 月 22 日(金) 県立総合教育センター

第 1 部 事例発表 かながわ学びづくり推進地域の取組

「南足柄市における学びづくり研究」

～『確かな学力』の向上をめざした指導の工夫・改善～

南足柄市教育委員会指導主事

室伏 秀元

南足柄市立岩原小学校総括教諭

杉崎 知子

南足柄市立南足柄中学校教諭

内藤 篤

「善行中の学力向上を分析する」

藤沢市立善行中学校教諭

池田 裕

藤沢市立善行中学校教諭

杉田 康平

第 2 部 パネルディスカッション

テーマ「小・中学校における学力向上に向けた取組の成果と課題」

～子どもの変容に目を向けて、チームで取り組む学びづくり～

コーディネーター

横浜国立大学教育人間科学部教授

青山 浩之

パネリスト

横浜国立大学教育人間科学部教授

池田 敏和

県 PTA 協議会執行役員

磯部 千尋

藤沢市立善行中学校長

大野 寛武

南足柄市立南足柄中学校教諭

内藤 篤

県教育委員会子ども教育支援課指導主事

小清水宣雄

5 これまでの取組の成果と課題

| 年度 | 取組等 ※ |
|----------|---|
| 平成 19 年度 | <ul style="list-style-type: none"> ■神奈川県検証改善委員会を設置 ■かながわ学びづくりプラン発行 |
| 平成 20 年度 | <ul style="list-style-type: none"> ■中井町で学びづくり事業がスタート |
| 平成 21 年度 | <ul style="list-style-type: none"> ◇三浦市、大和市、清川村、平塚市、中井町、箱根町 |
| 平成 22 年度 | <ul style="list-style-type: none"> ◇三浦市、清川村、平塚市、中井町、箱根町 ■教育指導と生徒指導の一体化 |
| 平成 23 年度 | <ul style="list-style-type: none"> ◇逗子市、寒川町、綾瀬市、清川村、秦野市、伊勢原市、大井町、山北町、小田原市、湯河原町 ■かながわ元気な学校ネットワーク推進会議設置 |
| 平成 24 年度 | <ul style="list-style-type: none"> ◇逗子市、寒川町、綾瀬市、座間市、秦野市、伊勢原市、大井町、松田町、小田原市、湯河原町 |
| 平成 25 年度 | <ul style="list-style-type: none"> ◇茅ヶ崎市、葉山町、厚木市、愛川町、大磯町、二宮町、松田町、開成町、真鶴町、湯河原町 |
| 平成 26 年度 | <ul style="list-style-type: none"> ◇茅ヶ崎市、葉山町、藤沢市、厚木市、愛川町、大磯町、二宮町、開成町、南足柄市、真鶴町 |
| 平成 27 年度 | <ul style="list-style-type: none"> ◇鎌倉市、寒川町、藤沢市、綾瀬市、海老名市、愛川町、大磯町、南足柄市 ■全ての市町村で実施となる |
| 平成 28 年度 | <ul style="list-style-type: none"> ■広く実施を募集 ◇鎌倉市、茅ヶ崎市、三浦市、寒川町、厚木市、海老名市、愛川町、大磯町、南足柄市、大井町、山北町 |

(1) これまでの取組の概要

- 平成 19 年度から、全国学力・学習状況調査が始まりました。
- 平成 20 年度から、中井町で「かながわ学びづくり推進地域研究委託事業」が始まりました。
- 平成 21 年度には、実施市町村を県内 6 地区に拡充し、各地域の実情に応じた取組が進みました。
- 平成 22 年度には、課の再編が行われ、子ども教育支援課に生徒指導グループが加わり、教育指導と生徒指導の両輪で、学校への指導・助言を行うようになりました。
- 平成 23 年度には、実施地域を県内 10 地区に拡充しました。また、シンポジウムでの発表地区以外の研究成果について、ポスター等での情報発信を始めました。
- 平成 25 年度には、愛川町が元気な学校ネットワーク推進会議のモデル地域となり、町の事業と有機的に組み合わせた取組を行いました。
- 平成 26 年度には、県内の各地域への普及の段階から、より積極的な活用の段階へと進みました。同一地区にできるだけ同じ指導主事が訪問して継続的にかかわり、その変容を見取るよう努めてきました。
- 平成 27 年度までに、政令・中核市を除く県内全ての市町村で事業を実施することができました。

※ 表中の■は主な出来事

◇は推進地域

(2) 成果

＜継続性のある授業改善の取組＞

各学校では、地区内・外に開かれた公開研究会や研究協議会の工夫、市町村教委発の地区版「学びづくり通信」の発行、「家庭学習の手引き」の作成・配付など、地域により様々な取組が行われています。そして、この事業の委託終了後も、市町村独自の「学びづくり」の取組につながり、継続した授業改善の取組を行っている地域があることは大きな成果であると言えます。

＜授業研究の活性化と支援の仕組みづくり＞

また、この事業では、県指導主事が市町村指導主事と共に学校を訪問し、学校で行われている授業改善の取組を言葉にして価値付け、授業研究の活性化を図っています。さらに、指導主事の学校訪問とともに、委託校には、継続的に外部講師が助言をする仕組み作りの支援を行ってきました。

＜成果の発信＞

この事業で得られた各学校の成果については、シンポジウムやリーフレット、ポスター発表、さらにはかながわ元気な学校づくり通信「はにいい」、神奈川新聞「教室に行こう」等により発信し、各地域にあった取組の参考となるよう努めてきました。さらに、平成 27 年度には、全国学力・学習状況調査の結果を活用して、学びづくりの成果について検証する取組が見られるようになりました。

＜全県への普及から積極的な取組へ＞

平成 20 年度から普及を目的として実施してきたこの事業ですが、平成 27 年度までに全ての市町村で取り組むことができ、平成 28 年度の委託募集では、11 市町村から希望がありました。このように多くの市町村から希望があったことは、この事業の取組の必要性・有効性が認識されてきたことであると考えています。

(3) 課題

＜成果の検証＞

全国学力・学習状況調査の結果を活用して、学びづくりの成果について検証する取組が見られるようになってきましたが、今後、授業改善についての様々な成果を検証するための具体的な指標を設定することが求められます。

その理由としては、p 3 で示したように、この事業のねらいが、

「授業の中で、『子ども同士の学び合う力』を育成し、学びの質を向上させるため、指導方法の工夫・改善、研修・研究に努める」とあることから、子ども同士の学び合い、学びの質の向上をどのような指標で評価し、目に見える形にするかが重要なポイントになってくるからです。

今後は、こうした点を「かながわ学力向上支援連絡会議」の場で十分議論し、市町村教育委員会と共有しながら、真の学力の育成に努めていくことが求められます。

＜広報の工夫＞

さらに、各地域の取組の普及・啓発のための広報の工夫が必要であると考えています。

<資料>

<資料>

- 1 かながわの学びづくりプラン…………… 38
- 2 「平成 19 年度全国学力・学習状況調査(神奈川県)の結果と分析、並びに今後の指導への示唆」…………… 76
- 3 平成28年度かながわ学力向上実践推進事業…………… 90
- 4 かながわ元気な学校づくり通信「はにい」…………… 91
- 5 「教室に行こう」…………… 96
- 6 各事業要項等…………… 98
- 7 かながわ学びづくり推進地域研究委託事業に取り組んだ学校一覧……………102